

肺炎球菌とワクチン（プレベナー）について

What's new?

2013年11月から肺炎球菌ワクチンがこれまでのプレベナー（7価）からプレベナー13（13価）に一斉切り替えとなります。プレベナー13はより多くの型の肺炎球菌に対応しています。

1) 肺炎球菌とは？

肺炎球菌は多くのお子さんののどや鼻にいる菌で、特別な菌というわけではありません。ふだんはおとなしいのですが、大人にくらべてこどもは抵抗力が弱いために、肺炎球菌による重症の病気をひきおこしやすいと言われています。

2) 肺炎球菌がひきおこす病気

「肺炎球菌」という名前からもわかるように、こどもの「肺炎」の30%が肺炎球菌によるものとなっています。しかし、肺炎球菌は肺炎だけではなく、実にさまざまな病気をひきおこします。

脳や脊髄をおおっている髄膜の中に入りこんで「細菌性髄膜炎」をひきおこしたり、血の中に入りこんで「菌血症（敗血症）」をひきおこしたり、耳や鼻の奥には入りこんで「中耳炎」や「副鼻腔炎（いわゆるちくのう）」をひきおこしたりします。

「菌血症」は肺炎球菌が血に乗って体中をまわるのでいろいろな臓器障害をひきおこす重い病気です。この菌血症の原因のなんと80%は肺炎球菌です。また細菌性髄膜炎の20~30%は肺炎球菌が原因で、ヒブに次ぐ多さとなっています。このような重症な病気は飲み薬の抗菌薬ではほとんど防ぐことができません。

世界中では毎年70万~100万人の5歳未満のお子さんが肺炎球菌が原因で亡くなっていると言われています。

3) 肺炎球菌ワクチンとは？

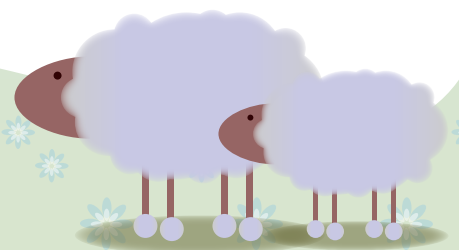
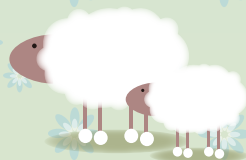
7価肺炎球菌ワクチン（プレベナー）は2010年2月から日本で使えるようになり、2013年4月から定期接種となりました。プレベナー（7価）の普及で髄膜炎をはじめとした侵襲性肺炎球菌感染症は普及以前の約30%にまで減りました。これは定期接種以前のデータですから定期接種後はさらに重症感染症は減ると考えられます。

世界各国ではその後開発された13価肺炎球菌ワクチン（プレベナー13）に切り替わっており、プレベナー13（13価）は現在120カ国以上で承認され、69カ国で定期接種に組み入れられています。

肺炎球菌には多くの型（血清型）があり、プレベナー（7価）に比べてプレベナー13（13価）のほうがより多くの型の肺炎球菌に対する予防効果があります。特にプレベナー（7価）ではカバーできない19Aというタイプの肺炎球菌が現在問題となっていますが、プレベナー13（13価）では19Aに対する予防効果もあります。

副反応の多くは接種部位の発赤や腫れ、硬結（かたくなる）、注射後のふきげんなどです。また、1割程度の人に38℃以上の熱が出ることがありますが、安全性は高いと考えられています。

>> 裏面へ



4) ワクチンの接種スケジュール（初回接種3回＋追加接種1回＝合計4回）

なるべく早く免疫をつけるために生後2ヶ月になったら接種を開始しましょう！
複数の病気に対する免疫を早くつけるためにも同時接種をおすすめします。
追加接種はだいたい1歳から1歳3ヶ月時に1回接種します。

7ヶ月以上12ヶ月未満のお子さんでは初回接種2回＋追加接種1回の合計3回で、
1歳以上2歳未満のお子さんは2回、2歳から6歳未満のお子さんは1回の接種です。

これまでプレベナー（7価）で接種を行っていたお子さんは2013年11月から
プレベナー13に変更して接種を続けてください。

4回の接種を完了したお子さんはプレベナー13でさらに追加接種をするとよいと
いわれています（この場合は定期接種ではありませんので自己負担になります）。

詳しくは厚生労働省のQ&Aをご覧ください。

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/ga_haienkyuukin.html

5) 最後に

肺炎球菌による重症感染症はワクチンで防げる病気です。

ヒブワクチンとともに接種をすることで細菌性髄膜炎の90%以上を防ぐことができます。

小児用肺炎球菌ワクチンが定期接種化になり、さらにプレベナー13に切り替わることで
より肺炎球菌による重症感染症を防げると考えられます。

2013年9月 改訂
高嶋 能文



たかしま よしふみ

高嶋 能文

山梨医科大学卒
日本小児科学会専門医
日本血液学会血液専門医
日本がん治療認定医
日本性感染症学会会員
日本エイズ学会会員

自由が丘メディカルプラザ 小児科

<http://www.jiyugaokamp.com/s>

TEL : 03-5731-3565

